

先生のための「夏休み経済教室」8月22日中学校向け 記録

日時：2023年8月22日（火）9：30～16：00

場所：慶応大学三田キャンパス+ウェビナー配信

参加者：対面+zoomによる視聴者 申込者数：214名 実出席者数：158名（関係者含）

司会進行：小谷勇人（春日部市立武里中学校教諭）

テーマ：「経済の視点で社会科授業をつくる」

・主催者挨拶 東京証券取引所 鈴木深氏

今年で16回目の経済教室。変化の激しい時代に合って現実と教科書のギャップを埋めて授業を考えていく。オンラインを活用した金融経済教室の案内。

1時間目 「JPXの最新の動きと金融経済教育の取組み」（9：35～10：45）

1-1 講師：鈴木深氏（東京証券取引所 金融リテラシーサポート部）より紹介

(1) JPXについて

2013年からJPX（日本取引所）がスタート。1999年までは株式売買立会所による手サインでの取引。2000年以降はコンピュータによる取引。1秒間に750回というスピードで情報のやり取りができる。仕事内容としては、上場会社の審査・開示、株式の売買、清算決済を行っている。株式売買等による手数料収入が収入の約40%。

(2) JPX最新の動き

現物市場の機能強化に向けた取組みとして、後場の取引時間を30分延伸する（2024年11月5日にシステム更改予定）。
証券コードへ英文字を組み込む。2024年1月1日から。

(3) 最近の金融経済教育の取組みについて

JPX マネ部ラボ!の紹介。2022年4月からスタート。社会人や学校教育に深く関わる組織。社会人向けと学生向けにプログラムを用意している。講師の派遣、教師向け講座、親子経済教室などを開催している。（久々の対面開催）

中高生向けの金融クエストを開発。また株式学習ゲームリニューアル版をリリース。仮想所持金1000万円を元手に東証の上場会社から現実の株価（終値）に基づき模擬売買を行うことができるシミュレーション教材。

「18歳から始めるつみたてNISA」の教材を新たに開発（50分授業）

(4) 親子経済教室からよくある質問について

①「株式の売買は何歳からできる？」②「一番高い株価は!？」③「株価はどのよ

うに決まる!？」④「証券取引所はどうして利益を得ているの!？」⑤「上場会社になるには!？」→それぞれについてスライドを使って説明。

(5) 市場区分の見直し

2022年4月よりプライム市場、スタンダード市場、グロース市場3つの市場区分に分けられる。上場会社の業種の違いについて→ビジネスモデルの違い。情報・通信業が全体の15%を占める。

(6) 大学入試問題から

日本の株式市場の株主分布について→外国法人等からの投資が1990年以降増加し、現在では3割を占めている。

(7) 新教材「18歳から始めるつみたてNISAの紹介

オンラインでの説明。「投資」「株式」という言葉にアレルギー反応を起こさないようにつみたてNISAに簡単に触れて頂く教材として開発。先生方も扱いやすいように「PowerPoint」「手引書」「ワークシート」を準備している。実践したい先生がいたらご連絡を頂きたい。

(8) 最近の株式市場の動き

株価が上がった業種、下がった業種とその理由について説明。2022年一番上がったのは鉱業。物価高・原油高を背景に株価上昇。

2023年おおむね株価は上昇基調。すべての業種で株価が上がっている。一番上がっているのは鉄鋼。中国への輸出が増えるであろうということで増加。インフラ部門の建て替え需要もあり増加。

このように国際情勢が株価に影響を与えている事例を分かりやすく説明。

(9) 東京証券取引所及び大阪取引所からのライブ配信

それぞれの取引所から見学コースと展示内容の紹介

東証→上場の鐘。企業が上場した初日に記念に5回鳴らす。五穀豊穡に由来

大阪→立会場は天井がガラス張りになっている。相場が青天井に上がるように

現在案内付きの見学を受け入れているので、様子をじかに見ていただきたい。

2時間目「経済の視点から地理の授業をつくる」(10:55~12:05)

2-1 授業提案：行壽 浩司氏（福井県美浜町立美浜中学校 教諭）

(1) 教材化の視点「需要と供給」「希少性」

- ・歴史的分野における大航海時代の単元で香辛料を求めてアジアに進出したことを経済視点から学ぶ。

→現在でも、銀と同じ価値を持つ香辛料がある。2017年にマダガスカルを襲ったサイクロンでバニラビーンズの価格が高騰。→「昔だから」ではない。

- ・私たちの消費行動が、他の国地域に影響を与えているという視点→「エビと日本人」
「私たちがエビを食べるという消費行動が東南アジアのマングローブ林破壊につながっている」+ α として「エビやパーム油の大量生産によってカワウソの生息地が減っている」→南アメリカ州「ハンバーガーコネクション」に通じるネタ
- ・中学の授業では分かりやすさを求めて「需要と供給」で説明をしがちだが需要量に関わらず、とれる場所がそもそもアンフェア→何でも「需要と供給」で片づけない。「希少性」について考えさせたい。

(2) ある国をピックアップして授業化する

・インド

インドのマクドナルドでは「マハラジャ・マック」が販売されている。どんなもの？
→チキンバーガー。なぜか？→ヒンドゥー教徒（人口の80%）は牛肉を食べない。
視点を切り替えると、インドの人口は14億人であるから、20%にあたる3億人は牛肉を食べる。牛肉の大きな市場が広がっている。

(3) 「コスト」から地理の授業を捉えなおす

・インドでIT産業が盛んな理由を「コスト」から考えてみる

- ① デジタル人材の育成→数学と英語が得意な人材が多い方が、コストが低い
- ② 多国間のやり取り→英語ができる人材が多い方が、コストが低い
- ③ アメリカと昼夜が逆→24時間対応できるためコストが削減できる
- ④ カースト制度の制限がない→新しい産業なので人材のコストが低い
- ⑤ 地政学という学問から、海をすべて支配することはコスト面から不可能。コストで考えた時に、シーレーンが発生。シーレーンのチョークポイントを支配することで、制海権を得る。地理的要因から経済を考えることができる。
- ⑥ 日本は島国だから船での輸送がしやすくコストがかからないという最大の利点がある。→イギリスと日本は似ている。シー・パワーによって経済発展。
- ⑦ 「北海道ではバナナは作れない」のではなく、コストが高いから「バナナを作らない」のである。「雪バナナ」のようにコスト面がクリアできれば可能。「希少性」「話題性」がある。環境決定論ではなく、環境可能論で授業を考えていくのも大切。経済地理学は地域経済（ミクロの視点）に親和性があるのではないか。

(4) まとめ

地理的分野は経済の視点で捉え直すことで教科書とのギャップを埋めることができるのではないか。その時にキーワードである「コスト」で授業の再構成を提案した。教育現場にて行われている実際の授業を考えた時に、授業内容の分かりやすさのため

に環境決定論で授業をしがちであるが、コストの視点から環境可能論で教材を捉え直すことが必要ではないか。

2-2 コメントと指導：三橋 浩志氏（文部科学省 初等中等教育局 教科書調査官）

- ・経済地理学習という視点で、学習指導要領上どんな位置づけになっているかを考えていくと、小3から同心円拡大理論でマイクロ視点からスタートし、徐々にマクロ視点で地理（地域）を学びはじめ、地名物産にならないように動態地誌学習で工夫を行っている。中学校は地誌学習のため、あくまで地域の理解を深めることが目的。経済地理的事象の理解ではない。
- ・「18歳成人」は現場の教員はとても苦労している。例えば、大手クレジットカード会社は、内規で18歳（高校生）は契約を結べないようにしている（1月にイオンカードだけは契約可能になった）
- ・物産の暗記だけ批判から基礎的な知識が不要なのか？ということも考える必要がある。国民の基礎教養として最低限知っておくことで議論ができたり、思考が深められたりするとはある。
- ・現実の経済現象と学習内容の乖離にどう向き合うか。「四大」工業地帯という用語がいまだ消えない。「チューリップ日本一は富山県」という言説。輸出が経済成長を支えた時代、富山から球根が輸出された。今、切り花の日本一は新潟県である。イメージとして残り続けてしまっている。
- ・「経済効率性」だけで人間は生きていけないことにも気づかせることが社会科教育では重要。ただ一方で、「地球全体での幸福」と「個人としての幸福」とのバランスを図る視点を持つことも肝要。

2-3 質問と回答

Q：目黒第八中学校の稲垣先生（数学教員）

数学ではあるが、SDGsには取り組んでいる。数学×経済を結び付けて授業を出来ないかを考えている。SDGsのことについてもっと話を聞きたい。また、評価の観点から教科横断的に評価規準を見るが、社会科の評価が「おや？」と思うことがある。現場でどのように評価をしていくのか。

A：行壽先生から

パフォーマンス課題を評価にあてている。また実際を考えた時にテストに多くを依拠している。であるならば、（例え教科書に記述がなかったとしても）授業で扱ったものをテスト問題として扱う。

リアクションペーパーの扱いについては、生徒の成績のために使用するだけではない。教員の授業改善のための評価があってもよいのではないか。

三橋先生から

評価の規準、学びに向かう力をどう評価するのか、先生が求めるような感想文を作る生

徒がいる、生成 AI を活用してしまう、それで評価するのはどうなのか。児童生徒の実態に応じて各先生方が見るようにしていただきたい。国立教育政策研究所で示しているものがあるので、それを見ていただきたい。

SDGs について教科横断的に取り組んでおられるということでは素晴らしい。教科での学びがベースにあって、それを探求につなげていく事ができるのではないか。

3 時間目「経済の視点から歴史の授業をつくる」(13:15~14:25)

3-1 授業提案：梶谷 真弘氏（大阪府茨木市立南中学校 教諭）：理論編

(1) なぜ歴史学習に経済の視点が必要か。

- ・経済の視点を入れることで、当時と現代の視点を往還して、民主的な市民に必要な見方・考え方を身につけることができる。また、現代社会で活躍する現実の社会問題を解決するための資質・能力を育成することができる。

(2) 歴史学習に取り入れる経済の視点

- ・マンキューの「経済の 10 大原理」をもとに「歴史学習に取り入れる経済の視点」を作成。

経済の大前提＝希少性、トレードオフ

意思決定のベース＝コスト、インセンティブ

小さな規模での経済の視点＝市場、交易

大きな規模での経済の視点＝政府の役割、税、経済システム

この視点を用いて、歴史を学習することで、理解が深まる。

(3) 時代の転換期を経済の視点から学ぶ

- ・明治新政府の政策について、一般的には「どのように変化したのか」を学習していくが「どうして、このような順番だったんだろう」と問うことで、経済的な見方になる。単元を貫く課題として、「明治新政府は何にお金をかけるべきか」を設定する。
- ・同じ構造で、戦後史の授業で「戦後の日本は何にお金をかけるべきか」を設定することで、同様の視点から学習でき、見方・考え方を深めることができる。

3-2 授業提案：玉木 健悟氏（奈良県・式下中学校 教諭）

(1) 戦後史で経済視点を導入する意義

- ・時間数が少ない（10 時間程度）にも関わらず内容量が膨大のため、語句の羅列になりがち。経済の視点を使って学習することで事実だけでなく、背景にまで迫ることができる。

(2) 「インセンティブ」と「コスト」に注目し判断に迫る～吉田茂総理の2つの判断～

- ・全面講和と単独講和のメリット・デメリットを整理することで、トレードオフの関係を理解した上で、意思決定に迫る。マトリクス軸で生徒の判断を可視化する。
- ・戦後史に限らず、どの単元でも「インセンティブ」と「コスト」で実践可能。

(3) 政府の政策の結果（影響）に注目し評価する～オリンピックを事例に～

- ・東京オリンピックの誘致を行った判断に注目することで、政策の結果（影響：メリットとデメリット）を経済視点でまとめる。

3-3 感想：横山 和輝氏（名古屋市立大学経済学部 教授）

- ・授業をつくるとはどういうことか

授業を作るとき、何を教えたいかが先行し、教わる側の実態が置き去りにされがち。

→「当事者意識をつくる」授業題材の生々しさ、臨場感を伝える教材とすることを意識せねばならない。

理科は実験を通じて、目の前で現象が現れる、数学であればコンピュータグラフィックスを通じて。では社会科で生々しさを味わわせるにはどうしたらよいのか。

→「史料を読む」公文書、日記、画像、統計 etc……。

例えば狂乱物価。米の値段を1960年ごろから読ませてみる。すると1973年で跳ね上がる。石油危機での物価上昇、主婦がどのように感じたのかを追体験させることができる。生々しさを味わわせることができる。

例えば気象の変化を日記から読み取る。桜の開花日の違いなどで見えてくる。同じ史料でも、史料の読み方を変えることで、全く違う景色が見えてくる。

→「明治政府にお金がなかった」を、生々しく伝えるには？

明治政府の歳入・歳出見込を見せてみるとよい。

- ・経済・金融の視点：未来と現在の対比、不確実性に対するまなざし、

歴史の視点：過去と現在の対比、可能性に対するまなざし

→「経済の視点で歴史を学ぶ」とは、「不確実性に対する挑戦的態度として当事者意識を史料から読み取ること」であるべき。教員は、史料に依拠しないストーリー作りを授業で見せてはならない。

- ・落とし穴

歴史は結果が明確、ゆえに誤った因果関係を示す危険。工夫のつもりが誤謬、ではダメ。

→実は私自身がそうした誤謬に陥ったこともある。例えば明治初期の高等小学校では算術の授業で金利計算が教えられていたが、このことについて教員の誰もが金利計算をきちんと教えているものと思っていた。

「元金 500 円年 2 割利にして三か年の重利幾何」尾關正求『数学三千題』
だがそうではなかった。だからこそ、現代でもカリキュラムに組み入れるべきとはなかないえない。

→突き詰めて調べてみると、算数を通じた金利教育がなぜ可能だった理由としてそろばんを使っていたことがクローズアップされてきた。

- ・明治以降の教育では、西洋由来の筆算を重視し始めた。筆算は得意だがそろばんが苦手という教員にとって、複利計算は教えづらくなっていた。
- ・史料を通じて学ぶ、というとき、史料に登場する人々がどんな状況に直面しているか、史料に書かれていない当事者の制約を意識することは実は難しい。その制約状況を知ることも歴史の醍醐味。
- ・その上で、試行錯誤を重ねて分野横断的に教材を提示することは有意義

3-4 質問と回答

Q: 栗原氏: 東洋大学で教員養成を担当している。教育実習生の授業を参観することがある。

歴史的分野の世界恐慌を教えているが、公民の株式会社を教えていないので、理解するのにすごく苦労している。カリキュラム上、現場はどうしているのか?

A: それを紐解いて深い理解になるのであればやるが、原因を追究することで本筋から逸れていくことがある。世界恐慌のところは「原因」を深めるのではなく「結果」を分かりやすく伝える程度におさめるのが現実的だと考えている。(梶谷先生)

A: 「株価は人気投票」と伝えている。ただしそれ以上のことについて、大学生相手ならともかく、中高生には難しい側面もある。例えば世界恐慌であれば 1929 年の株価暴落のことだと思われがちだが、より本質的なのは欧米での銀行の連鎖破綻や各国の失業者の増大など、数年間にわたる大不況到来を指している。こうしたことは、時間をかけて丁寧にやればできることもできるが、難しすぎる。それなら暗記で簡単に済ませて、詳しく知りたくなったら大学で学ぶという考え方もある。いちばん怖いのは中途半端に教えて知ったかぶりすること。まず大事なことは教科書に書かれている。さらに知りたければ大学で学べる、と示すことも一考。(横山教授)

4 時間目「経済の視点から現代社会の授業をつくる」(14:35~15:45)

4-1 授業提案: 小谷 勇人氏 (春日部市立武里中学校 教諭)

(1) 今回の提案の重点ポイント

①現代社会単元を既習の地理・歴史と政治・経済をつなぐ重要な学びとする工夫

→地理・歴史学習を終えて、さらっと流してやっしまいがちである現代社会単元。

地理・歴史の見方・考え方を働かせる単元構成と政治・経済・国際単元への接続を意識する重要な単元として位置づける。

②調べ学習を焦点化させるための自作 HP の活用

③2025 年大阪万博を教材として扱う魅力と切実性

→大阪万博は「参加者一人ひとりに対し、『自らにとって幸福な生き方とは何か』を正面から問うはじめての万博であると大阪市 HP で表明している。

④AI（人工知能）を重点的に取り扱う意義と経済に与える影響

(2) 自作 HP の活用

Google site を活用して、大阪万博についての資料を提示するサイトを作成した。

ある程度学習内容を焦点化させて、その学びを踏まえて展開させていくため

(3) 歴史学習の最終单元と公民の最初を繋げて行う单元構成

冷戦終結後の世界を1次（2時間扱い）で行い、2次（3時間扱い）で公民の現代社会を扱う。歴史の授業の時点で、公民の教科書を持ち込んで考えていく。

(4) AI（人工知能）を重点的に取り扱う意義と経済に与える影響について

教科書に載っている情報化の例の写真、古くなっている。それだけ情報化の進展は急速である。社会を劇的に変化させていく情報化の中でも AI の進展は目覚ましく、触れていく必要がある。

・授業の実際

① 各グループの調べ学習

② それぞれの視点で AI について学んだことをスライドに反映させていく

・授業実践を終えての考察

経済の視点を入れてスライド作成をさせたことで、学びが深まった。

・実践を終え、今後考えたいこと

経済单元は中3の終わり際の学習で駆け足になりがち、エッセンスは地理・歴史・公民の様々な学習で拾っていく。

現代社会の学習は地理歴史と公民をつなぐ重要な单元と位置付けたい。

AI は、社会、そして経済を激変させていくので手厚く扱いたい。

4-2 コメント：野間 敏克氏（同志社大学政策学部 教授）

・日本の教育は学習指導要領上では、タテの連携、ヨコの連携など、小中高大の接続がよく考えられているが、10年くらい前では、現場ではかなり受け止め方に差異があった。現在は、中学校のグループ学習などの社会科授業スタイルを取り入れて、高校の授業もかなり変わってきているのではないか。大学でも 200 名の学生で活動型の授業をする人もでてきている。

・公民の方が身近なはずなのに、地歴に比べて人間の営みが感じられない実践が過去には多かったが、最近はすごく意識して実践されている。

・小谷先生の実践では、地歴と公民の接続を意識して、現代社会単元をそれぞれの項目でぶつ切りにせずに「大阪万博」というテーマ（視点）を使って、現代社会の特色と課題を統合して考える挑戦的实践になっている。

・そのうえで、次の点はどのようなだろうか？

Q：大阪万博はどこへいった？→ A：単元後半で扱う予定

Q：グローバル化の例として芝園団地は適当か？→ A：内なる国際化の例として生徒にとって身近なものであるため

Q：経済的な見方や考え方に関してはあとの経済単元で学ぶから意識して避けたのか→
A：教えてもよいかもしれないが我慢した。万博準備の滞りに関しては、希少性、トレードオフの視点から光と影を多面的・多角的に扱う。

・AI で置き換わる仕事は、分業と交換という視点を学ぶことができたのではないだろうか？

4-3 質問と回答

Q：東京実業高校の先生（商業科）：中学で経済を学んだ後に、商業高校で「ビジネス」という視点から深めてみたいと思う生徒は出てくるのか。そうならない原因があるとしたら何かあるのか聞きたい。

A：小谷先生

起業家教育を頑張りたいと考えている。そうすると商業高校を志望する生徒もでてくる。ただし、経済単元が駆け足でやっていかなければならないという現状がある。中学校の先生方がどれだけ意識できるかで変わるのではないか。起業的な部分が教科書も含めて全体的に丁寧に取り組むようになれば、変化するのではないか。

まとめと挨拶（15：50～16：00）

・小谷先生から、2, 3, 4時間目の報告に関するまとめがあった。

・経済教育ネットワークの篠原代表から挨拶と補足の説明があった。

夏休み経済教室は、経済は教えづらいという現場の先生の声からはじまり東証の支援をうけて16回続いた。これからもこのような形で先生方の支援を続けたい。

関連して本日、配布した資料のなかの東証のメールマガジンのコラムの冊子があるが、それらのなかに授業で経済を扱う時のいわゆる「捨てネタ」としてとても良いものがあるので、冊子にしてもらった。例えば、「歴史の中の証券市場」の第六回目の「市場経済と金融」のコラムなどは、金融の本質が書かれていて、歴史学習のところだけでなく、公民の金融のところでも使えるネタである。参考にして活用してもらいたい。

以上、記録と文責：中西 覚 市川 慶太